
王子と魔女のマスカレイド

runaway

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子と魔女のマスカレイド

【Nコード】

N0507Z

【作者名】

runaway

【あらすじ】

好奇心で王宮の舞踏会にもぐり込んだ森の魔女イウレース。ちよっぴり見てみたかっただけなのに、王子にバレて捕まってしまい。まじめで世間知らずな魔女と、陰謀渦巻く王宮で生きる王子の物語。

01・舞踏会

きらめくシャンデリアの明かりの下で、きらびやかに着飾った人々が優雅にダンスを繰り広げている。

生まれて初めて目にする、そして最初で最後であろう王宮の舞踏会。

見たこともない楽器から紡がれる楽の音と、天上人かと思ふ貴婦人たち。

イウレースは忍び込んだ広間の片隅に隠れるようにして、夢のような眺めに目を奪われていた。

こんな世界が、本当にあるんだ……。

いくつかの偶然と出来心が重なって忍び込んでしまったが、それだけの価値はあった。片田舎の小さな村の呪い師である自分に、こんなものを目にする機会が次にあるとは思えない。

あと少し見たらと思いつつ、どうしても去ることができなかった。イウレースは魔法にかけられたようにひたすら光景に見入り続けた。だからぼうつと見惚れていた彼女は、自分に近づいてきた者の存在にまったく気付かなかった。

「一曲いかがですか」

横合いからかかった声で、イウレースは初めて我に返った。振り向いた先には、一人の男性が彼女に手を差し伸べていた。

「……はい？」

やや赤みのかった金髪にふちどられた際立つた美貌に、湛えられた完璧な微笑がイウレースに向けられていた。一瞬今いる場所も忘れて見惚れてから、鬱金の頭髮にまぎれた額冠が目に入った。

略式ながら間違いようのない意匠が示すところに気付いたイウレースは、ぎよつとして後退った。

今宵の舞踏会の主催者、この王宮の実質的な主がそこにいた。

「え、いえつ、あの……」

病床の王に代わり、ザルカルト王国を預かる王子は、とっさに断るために上げられた娘の手を取って引き寄せた。微笑みを絶やさぬまま、優雅にその甲に唇を触れてからややわらかに言う。

「そう遠慮せずともよろしかろう。今宵は無礼講。みな一夜の夢を等しく愉しもうではないか」

「あ……」

イウレースは彼に連れられて、広間の中央へ歩み出た。ゆるやかなワルツから始まり、曲のテンポは軽快に速まってゆく。王子は流れるような足さばきでステップを踏んで、ろくにダンスを知らぬ彼女を巧みにリードしていく。

導かれるままに廻る景色を眺めながら、イウレースは夢心地にひたった。

音楽の転調に合わせ、彼が娘の身体を引き寄せた。

互いが入れ替わる刹那、涼やかな声が囁いた。

「ニナンの魔女か」

「！」

はっとイウレースは相手を見た。だが確かめる暇もなく身体が回され、再び引き付けられた耳に声が届く。先ほどのやわらかさを失った、冷たい氷のような声音だった。

「うまく誤魔化していたようだが、残念だったな。そうニーナイ香臭くては、せつかくの術が台無しだぞ」

いつそうめまぐるしくなる曲のテンポに乘せられて、見た目の優雅さはそのままにイウレースはくると弄ばれた。そして時折訪れる交錯のたびに、嘲りに満ちた囁きのみが流し込まれ続ける。

「お前のような老いぼれ魔女まで駆り出されていたとはな」

「間抜けな奴だ。ほかの奴らが捕まっているのを見ていなかったのか」

「向こうもよほど手詰まりと見える」

「しかしあの婆がよく化けたものだ」

「どうした？ もう息が上がったか。年寄りの冷や水はよくないぞ」

曲が終わった。

イウレースは彼の手を振りほどいて離れ、逃げようとした。だが激しいダンスのあとで思うように動かぬ足がもつれて姿勢を崩す。

倒れそうになった身体を、しなやかな腕が支えた。

彼は目を大きく見開いて肩で息をするイウレースを見下ろして、穏やかに微笑んだ。うわべだけの穏やかさ、見せかけの優しさで心配げに言う。

「おお、疲れてしまったか？ これは悪いことをしたな。誰ぞに案内させるゆえ、少し休んでいるがいい」

王子の合図に従って現れた礼服の衛兵二人が、イウレースを両脇から支えた。身動きの取れない娘を見てもう一度、今度は冷ややかな視線を投げかけてうなずき、彼は背を向けた。

衛兵たちはイウレースを挟んだまま丁重に、だが有無を言わず歩き出す。

イウレースは半ば引きずられるようにして、茫然となりながら広間を出て行った。

02・魔女のまやかし（前書き）

暴力的な描写あり

02・魔女のまやかし

そうして夜も更けたころ、イウレースが閉じ込められた塔の小部屋に王子はやってきた。

もう一人、黒い魔法使いの礼装に身を包んだ男が部屋に入って、扉は閉じた。

先ほどまでとは違って変わって冷ややかな表情で、王子はイウレースを見下ろした。

「いつまでそんなまやかしを纏っている。さつさと本性を現わすがいい」

「あ……」

イウレースはうろたえて、応えることもできずただ彼の美貌を見上げた。

王子は苛立ったように背後に立つ男に目をやった。男はうなずき、片手を上げて指を動かしながら何事か呟く。同時にイウレースの周囲の何かが波立った。

無論それが「何か」は彼女にも判っている。

ヴェールのように纏っていた幻のドレスが剥ぎ取られ、中に隠していた毛織の衣服が露わになった。ごわごわした肌触り通りの見た目を取り戻した、実用重視の地味な現実の服に、一瞬己の状況も忘れて嘆息が漏れる。

一方その姿を見た王子は、苦々しげに舌打ちした。

「よばよばの婆のくせに、まだ若さに未練があるか。いや、いい」

やや驚いた様子で再び唱えかけた男を制し、彼はイウレースを見据えた。

「それほど大切なら構わん。ではその綺麗な貌が傷つけられる前に、大人しく答えるのだな。貴様は何の仕事を依頼された？」

「え……？」

ぼんやりと聴き返した瞬間、頬に鋭い痛みが弾けた。縛り付けられた椅子ごと倒れたイウレースの亜麻色の前髪をつかんで起こし、王子は凄まじい美貌を寄せて言う。

「とぼけるな。ここ二週間ほど、魔法使いがやたらと王宮に忍び込んでくる。おおかたあちらの手引きのためだろうが、貴様は何をする気にいる？ いやそれよりも、奴らはいつ攻めてくる？ 半年後か、一年後か それとも一月後か。答えろ」

痛みと驚きに朦朧となりながら、イウレースはただ首を振った。何を言われているのか、まったくわけが判らなかった。

だがそんな娘の様子に、彼の瞳は烈しさを増しただけだった。間を置かず反対の頬が張り飛びされる。

「おおよその裏は取ってある。ふざけた態度でいると、ただでは済まんぞ」

さらに二度、三度と繰り返された鋭い平手打ちに口の中が切れ、血の味が広がった。

それでもイウレースが応えることができずにいると、彼はいったん諦めて下がった。腕組みして、うんざりしたように頭を振る。

「わざわざ催した宴にかかったのがこんな小物で、しかもてこずら

せるか。

なんの餌に釣られたのかは知らんが、オークインにさほどの義理があるわけでもなかるう？ 何を強情を張ることがある」

「殿下」

その時、後ろの魔術師が声をかけた。

「この者の術が解けませぬ。まやかし破りも解呪も試しましたが、効かぬ様子」

「なに？」

王子は振り返っていぶかしげに問い返した。

「ニナンの魔女は、魔術にそう長けてはおらなんだと記憶していたが」

「はい、長くニナンの村の呪い師を続けた功で三級魔道士の允許を得ましたが、元来は本草術と占い程度の力しかなかったはずでございます。これは……」

魔術師がうなずく。

「ではニナンの魔女ではないというのか？」

確かにニナイ香の香り以外に、あの婆らしい癖は感じなかったが……」

「ですがほかにそれらしい術者の記録もございません……」

「……婆さまは……先週亡くなったんです……」

弱々しい声に、王子と魔術師は床に転がる相手に目を向けた。イウレースは痛みに涙を滲ませながら、かすれた声で必死に言っ

た。

「私、婆さまじゃ、ありません……」

王子がつかつかと歩み寄った。

かがんで娘を引き起こし、静かな声で問う。

「ニナンの魔女ではない？」

「はい……」

小さくうなずく娘に貌を寄せてのぞき込み、さらに低い声で囁くように言う。

「お前の名は？」

「イウレース……」

王子はしばし娘の瞳を見据えた。

痛みに霞む視界の中で、イウレースは彼のまなざしが心の奥まで入り込んできたのを感じた。与えられた名を手がかりに、彼女の中から必要な情報が引き出されていく。

朦朧とした頭の片隅でイウレースは理解した。

では彼も、魔道に通じているのだ。

やがて彼は娘を助け起こした。縛めを解き、椅子に座り直させる。表情を変えずに静かに言った。

「嘘ではないようだな」

「はい……」

イウレースはうなずいた。張られた頬が疼き、眩暈がする。

だが彼らの用事はまだ済んでいなかった。求められるままに、痛みを堪えながら訥々と語った。

「私……婆さまに拾われて見習いをしていたんです……。でも、引き継ぐ暇もなく突然亡くなられてしまつて……。それで今日は、登録を変更してもらいに来ていたんです。

そうしたら、舞踏会があるって聞いて……。どうしても見てみたくなつて……」

ほとんど魔が差したようなものだった。

奥田舎の村からはるばる馬車を使い継いで王都まで来たのは、「ニナン村の魔女」として登録されていた育て親の仕事を引き継ぐ手続きのためだった。

そして役所での何げない世間話で、イウレースは聞いたのだ。

今宵、王宮で大きな舞踏会が開かれる、と。

しかも今日は併せて病床長き王陛下の健康を願つて、王宮の大神殿も開放しての一般参詣も行われるということだった。そのため、身なりさえきちんとしていればついでに舞踏会をのぞくこともできるらしい　とも。

村からめつたに出ることもないイウレースは、好奇心をどうしても抑えることができなかった。

それで。

03・提案

「それで着る物がないからまやかしのドレスを纏って、というわけか」

「はい」

彼女の思考を引き取るように語られた言葉にイウレースはうなずいた。

一度傾けると、頭が疼いて重くてもう持ち上がらなかった。うつむいたまま呟く。

「ちよっぴりのぞいて、帰るつもりだったんです……」

「……引き継いでいらないと言ったな。だがあの術は？」

「普段の占いや呪いに使うものぐらいなら……。でも道具の要るような特別な術はまだ……」

「変更だと？ 抹消ではなく？」

「魔女ではなく、呪い師か薬師で登録し直して、続けるつもりでした……。村には、癒し手がないから……」

全体に嘘ではない。

だが真実すべてではなく、きわどい綱渡りでもあった。

実はイウレースは直接伝授されたわけではないが、育て親の術をほとんど修めていた。その上「ニナンの魔女」と呼ばれた彼女の育て親は、読みもしないくせに書物やら魔道書やらを集めるのがとにかく好きだった。反対に知リたがりの彼女はそれらをすべて読んで頭に納め、ある程度使いこなすこともできた。

だが別にその知識や力で何かしようという欲望は、彼女にはなか

った。また、癒し手のいないあの村を捨てる気にもなれなかった。イウレースはあの村が好きだった。

本を読んだり人を助けたりして、あの場所で穏やかに暮らすのが望みだったのだ。

今までの尋問と、名前を与えた瞬間に垣間見えた王子の底知れぬ力に、イウレースはとっさに悟った。突然の育て親の死に戸惑う、田舎占い師の娘で通すべきだということを。

九割がた嘘ではない。

ただ、自分の望みと身の安全を考えると、残り一割は絶対に知られるべきではない。

顎に手がかかり、顔を上げさせられた。頬に掌が触れて、低い祈りの言葉と同時に潮が引くように疼痛が収まる。

晴れた視界から白い掌が離れていく。代わって見えた王子の表情は穏やかさを取り戻していた。

「我々の勘違いだ。済まなかったな」

言って掌に纏いつく癒しの光の残滓を払い、彼は立ち上がった。

「だが運が悪かったと思って許してほしい。これは必要なことだったのだ」

イウレースは王子の美貌に改めて見惚れながら、ぼんやりとうなずいた。

痛みが引くと、今までの情報が繋がり始めた。

彼らは王宮　ザルカルト王国で暗躍する敵国の間諜や魔法使いの動向に神経を尖らせていたらしい。どうやら今宵の舞踏会も、意図的に警備を緩めて間諜を誘っていたようだ。

そこにあからさまな幻術で服装どころか、どうやら年齢まで偽っている魔女がやってきた。

疑われないほうがおかしかった。

「じゃあ……私、もう……？」

「そうだな　と言いたところだが」

王子は初めて困ったように言いよんだ。

「私も口を滑らせたな。今の状況が判っているか？」

「オークイン皇国が侵攻を企てている……？」

「そういうことだ」

彼は重々しくうなずいた。

「そして、今のところそれは私と側近数名しか知らない極秘事項だ。下手に外部に漏れると、いろいろとまずいことになる。例えば隣のハイグロウ王国が同調したり、王弟派やら反王政派やらの国内の叛乱分子が呼応して騒ぎを起こしたりと」

「殿下！」

背後の男が咎めるように声をあげる。

王子は軽く手を振って男を黙らせた。イウレースを見ては、肩をすくめて言う。

「つまりここまで知られた、ということだ。悪いがしばらく村に帰すことはできん」

イウレースは小首を傾げた。

仕方がないことは判ったが、それならば自分はどうすればよいのか。

「ここにいれば……いいんでしょうか？」

広間からここまでかなり歩かされた。連れてこられて尋問を待つ間も、人の気配は感じなかった。

閉じ込めておくにはうってつけの、離れにある塔の、その小部屋。

「まあそれがいいのだろうが……」。

人違いでこんなところに監禁するのも哀れではあるな。それにお前もいくらなんでも暇だろう」

王子は苦笑してしばらく空に視線を彷徨わせた。突然娘を見て真顔で問う。

「しばらく侍女でもしてみるか？」

「殿下！」

即座に魔術師が非難の声を上げた。

「仮にも呪い師ですぞ。いかにして外部と連絡を取るやも知れませぬ。それにそのように自由に王宮を歩かせるなぞ」

「名は奪った。下手な動きをすれば判る」

そっけない王子の返答に、魔術師はいつそう苦々しげに眉を寄せる。

「またそのような軽率を……」

イウレースにも、彼の言葉の意味は判った。

名を聞くだけならばさほどの問題はない。だが王子は先刻イウレースの名を己のものとするために、彼女の中に入ってきた。術者ここではイウレースだが、の力が強ければ、この時反対に相手を絡め取ることもできる。奪うことは奪われることと紙一重なのだ。イウレースは王子と魔術師を見上げて言った。

「あの、私が軽率だったのだし、差し支えなければここにいます。別に一人でいるのは苦になりませんから」

魔術師はほつとしたようだが、提案を断られた王子はまじまじと見つめ返した。

「ここに？ 生活はどうする。誰か世話に割けと？」

「よろしければ誰かにお願いするか一度戻らせていただくかして、ニーナイ香とジョラムの丸を取って参ります。あの丸のもたらす眠りなら、夢を見ることはありません。」

十日に一度ほど香炉にニーナイ香を足してさえくだされば、終わるまでご迷惑をおかけしないで済むでしょう」

「……ずいぶん高価な眠り姫だな」

「ご存知の通り、ニナンの村はニーナイ香の産地です。腕の足りぬ呪い師も、あの香にだけは困ることはありません」

「……身の危険は」

王子は魔術師を振り返って問うた。

彼と同世代と思われるまだ若い魔術師は、しばし考えるように首を傾げた。やや置いて主にうなずきを返す。

「悪しき毒ではございません。……その方策がよろしいかと」
「そうか」

王子は呟いてから娘を見て言った。

「お前がそれでよいと言うのなら、終わるまで寝ているがいい。
このスーデイルムが同行するゆえ、今から行って必要なものを取
ってこい」

言い終えると彼は踵を返し、部屋を出て行った。

石段を下る足音が遠ざかってから、魔術師が静かに言った。

「跳べるか」

イウレースは無言で首を横に振った。

魔術師は立ち上がった娘の手を取り、空いている手で印を切った。
低い詠唱に続き、二人の姿はかき消えた。

04・森の塔

夜更けの森は静まり返っていた。

イウレースは木戸を開けて闇に包まれた庭を突っ切り、塔の鍵を開けた。

石造りの小さな塔は田舎の呪い女にしては上等な住処だが、元はと言えばどこかで名を成し世を捨てた隠者が魔法使いの住処であつたらしかった。彼女の育て親がこの地に来た時には所有者は絶えて久しく、村から少し外れた山すその森に住みつこうなどと考える者もいなかったらしい。

イウレースは彼女の育て親から、この打ち捨てられた塔をいかに片付けて居心地のよい空間に仕立て上げたかを、幾度も聞かされたものだ。

闇を手探りしてランプに火を灯し、イウレースはさっそく棚から必要なものを探し始めた。

ニーナイ香はすぐに見つかったが、ジヨラムの丸薬は切らしていることが判った。急いで必要な薬草をかき集めてすり鉢に放り込む。

背後で青白い光が広がる。魔術師が杖の先に明かりを灯して室内に踏み込んできた。影を切り取ったような黒い法衣からのぞく白い肌と、光を弾く白っぽい金髪が浮かび上がる。

イウレースは肩越しに視線を送り、薬草を搗り潰しながら言った。

「すみません。すぐ造りますから」

「ああ」

魔術師は手近な椅子に腰を下ろした。

しばらく黙って娘の作業を眺めていたが、やがて静かに言った。

「本当によいのか」

「……」

イウレースは棚からミロの実を取り出し、鉢に加えた。潰したとたんに漂った独特の刺激臭に目を細めて、小さな声で応える。

「信用しています」

「ふむ」

魔術師は呟く。

ではこの娘も理解しているのだ。

ジョラムの丸薬は仮死に近い眠りをもたらす魔法薬。

ニーナイの香は一部の魔法効果を強化、持続させる特殊な効能を持つ。

どちらも確かに身体を損なう毒ではない。

だが問題なのは「眠りを操る」という事柄自体の危険性だった。例えば醒めぬ浅い眠りは、すなわち醒めぬ夢。永久に続く悪夢に苛まれれば、人の心などひとたまりもない。反対に醒めぬ深い眠りとは言えば、一歩進めばすなわち死にほかならぬ。

くべる香の量によっては夢見ぬ眠りは永久に醒めぬ眠りともなりうる。極端な話、本人は眠っているのだから何をされても判りはない。

そのようなことすべてが、他人の手に委ねられるというのだ。

「私が言えた義理ではないが、なぜ侍女を選ばなかった」

「……王子殿下はご立派なおかたです」

すり潰して調合を終えた材料を水と共に鍋に入れて火にかける。
やがて煮立った鍋から丁寧な灰汁を掬いながら、イウレースは己の
感じたことを考え考え言葉に直して言った。

「ご病気の王陛下に代わり、国を背負っておられます。それなのに、
さしたる力もなさそうな呪い師まで自ら捕まえて尋問なさる。

責務以上のものまで、すべて背負おうとなさっておられるように
感じました」

現王は後宮を好まず、今は亡き王妃との間に子が一人しかできな
かった。そして王が病を得ている今となつては、今後王子が増える
ことはない。

またこの国では王子は代替わりの際に神殿から託宣を授かるまで、
個人としての名前を持たない。継承候補を呪殺などの危険から護る
ためとされる。

つまりあの王子は「リサルヴィア」という王家の一員としての姓
のみを持つ状態だ。

王の病状は思わしくなく、意識は曖昧で譲位の意思を示すことも
できぬといううわさだ。

それは言い換えれば、王子には中途半端な状態で王族の責任だけ
がのしかかっていることになるのではないか。

「殿下を憐れんだと？」

「そんなわけでは……。ただ」

王子の言動の端々に感じた。

責任を果たそうという強い心と、身分にこだわらず示される気遣

い。

「お優しいかたなのだと、思いました。

それでこのようなお忙しい折に、瑣末事で負担を増やしたくはないと思っただんです」

「　　そうか」

魔術師は言った。それきり会話が絶える。

やがて液体から灰汁が出なくなっただ頃合を見て、イウレースはゆつくりと歌うように呪文を唱え始めた。紡がれたまじないは薬液に降りかかり、かき混ぜることで染み込んで溶けていく。そして魔法を含んだ液体は、さらに煮詰めることでその効能が凝縮されていく。

充分に煮詰めてから、イウレースは鍋から煮えた液体を皿に取り、冷まして小瓶に詰めた。本来はもっと水分を飛ばして練って丸薬にするのだが、このまま飲み薬にしても効果が変わるわけではない。驚くべき苦味とこの世のものとも思えぬえぐみさえ気にしなければではあるが。

ニーナイ香と小瓶を袋に入れ、各部屋をまわって最低限片付けてから魔術師を見る。

「できました」

「ああ」

魔術師は立ち上がった。

だがそのまま娘のほうには行かず、歩いていって階段脇の石壁を杖で叩いた。

するとぐぐもった音とともに幻の石壁が揺らめき、代わりに木戸が現れた。掲げられた杖の明かりに照らされて、隠し部屋の棚に並

ぶ本の背表紙が陰影を作った。

魔術師は杖を一巡りして書物の背を追っていった。やがて木戸を閉めて再び表面を叩くと、元通りの石壁が現れる。

目を見開いて固まった娘を見やり、魔術師は静かに言った。

「まあ、よかろう。お前の心に免じて殿下には黙っておこう」
「……」

イウレースは深々と頭を下げた。

05・目覚め（前書き）

残酷な描写あり

05・目覚め

深い、深い闇。

どこまでも落ち込む、無明の世界。

その闇の池に、突然波紋が広がった。

細波を立てながら闇が薄まり、沈んでいた意識が浮き上がっていく。

透明な広がり、光が差し込んだ。　　思ったところで泡が弾けた。

うつすらと目を開いた先に見えたのは。

二顆の青玉と、サファイア貌をふちどる鬱金の滝。

「馬鹿者が」

耳に落ちてきた音に反応して、イウレースはぼんやりと目をしばたいた。深い眠りから起きた者の常として思考が働かず、状況が理解できない。

やがてようやく目の前の男性の貌と、眠りに墜ちていた己の記憶が繋がった。

「……王子殿下」

「スーデイルムと二人でたばかったな。危険な真似を」

王子は苦々しげに言うといウレースから離れた。

扉のある側の壁に寄って耳をそばだてる。何かを聴き取って舌打ちし、厳しい声で呟いた。

「ちつ。来たか」

「…………あの…………？」

眠る前の王子の言葉が思い出される。「終わるまで寝ているがい」と彼は言った。

目覚めたということは、状況が一段落したのではないか。

身を起こしながら彼のほうを見ていると、王子は音を立てぬよう注意深く扉に門をかけて戻ってきた。声を低めてイウレースに囁く。

「今は待て。

撒けなかったようだ。遣り過ごせなければここに来る」

「え…………？」

イウレースの戸惑いの声の余韻が消えぬうちに、扉の向こうで石床を叩く音が聞こえてきた。いくつもの足音が近づき　そのまま通り過ぎていく。

だが連れてこられたときのイウレースの記憶によれば、ここは王宮の外れのさらに奥まった一角だった。恐らくこの先は行き止まりのはずだ。

いったんは去った足音は、さしたる間を置かず再び戻ってきた。音が、止む。

王子は動きを止めて息を潜めていたが、足音が扉の前で止まった瞬間に鋭い声で囁いた。

「下がって隠れている」

同時に扉を叩いたり蹴ったりする激しい音が響く。王子は抜剣し

ながら戸口に進み出た。

衝撃が加わることに、みるみる扉が内側にたわんでいく。

そしてついにひしゃげた門が弾け飛び、頑丈な木の扉が破られた。

躍り込んできた人影が、王子の剣の一閃で血飛沫を撒き散らしながら崩れ落ちる。

続けて扉から侵入しようとする敵を、鋭く牽制して押し戻した。

王子はその後扉の狭さを巧みに利用して一度に相手にする数を制限し、二人三人と敵を屠っていった。

だが茫然と見るイウレースの前で幾人目かが斃れたところには、明らかに動きが鈍り始めた。

よく見れば、ずっと敵に正対しているはずの王子の衣服は背中側が裂けて血で染まっている。

「国内の叛乱分子が呼応して騒ぎを起こしたり」「以前聞いた彼の言葉がよみがえった。不意を突かれ、とりあえず逃げてきたのだろうか。」

イウレースは精神を集中しながら空に指を滑らせた。

然るべき言葉を唱え、喚び起こしたイメージを魔法に織り込み凝縮して解き放つ。

轟音と共に、部屋と廊下を区切る地点に炎の渦が出現した。

「！！」

戦っていた王子と敵は、とつさにそれぞれ炎の範囲から跳び退る。イウレースは壁を離れた。見られないよう扉の正面を避けて壁伝いに走って、轟炎の渦巻く戸口に向かう。引き戻そうとする王子に、早口で小さく囁く。

「体を、早く」

言いながらイウレースは自ら倒れる刺客を引つ張って、部屋の内側に引き込んだ。焼け焦げ一つない体を見た王子は、すぐに覺つて死体を炎の当たる部分から退けた。

向こうから見えない壁際に寄ってから王子は娘に囁いた。

「幻か」

イウレースはうなずいた。

人を引き摺るという行為は、非力な女の身には荷が勝った。息を切らしながら言う。

「向こう側には、熱も、少し……。でも、時間稼ぎぐらいにしか」
「その時間が重要だ。逃げる途中でスーデイルムらには知らせた。衛兵もそろそろ来るだろう」

王子の言葉にイウレースはほっとして息を吐いた。
いくら熱くとも、しょせんはまやかしだ。覺悟を決めてほんの一步踏み込むだけで本物の魔法の炎でないことなどばれるだろう。そして王子を狙うなどという輩が、そう長く躊躇してくれるとも思えない。

少し余裕のできたイウレースは改めて王子を見た。まだ油断なく剣を握り、娘を背にかばう位置で扉のほうを注視している。
恐る恐る声をかけた。

「お怪我を……？」
「かすり傷だ」

イウレースの声にわずかに首を捻って視線を送った王子は、どうということもないように応えた。扉に向き直ってからふと苦笑を含んだ声音で続ける。

「だが確かに、治す暇はなかったな。しかも、焦って味方にも判りにくい方角に逃げてしまったようだ」

炎の向こうで喧騒が広がった。

怒号が飛び交い、剣戟と逃げ去る足音と追う足音が交錯する。片方が圧倒的な勢いでもう片方を呑み込んだ。

やがて幻の炎が切り裂かれ、黒い人影が飛び込んできた。

「殿下！」

「大事無い」

焦りをにじませた宮廷魔術師の声にうなずきを返し、王子は剣を収めて歩み出た。

「敵は？」

「ほぼ全員捕らえるか殺すかいたしました」

応えてから魔術師は安堵のため息をついた。

「よくぞご無事で」

「いささか危なかったな。まさかあれが裏切るとは。完全に不意を突かれた」

王子はうなずいてから低く呟き、己に癒しを施した。落ち着いた声で問う。

「それで、出所は」

「恐らくは王弟派ではないかと。無論証拠はございませぬが、あの者を懐柔できた上で、ここまで短絡的な手に訴えるとなると。まず間違いないでしょう」

魔術師は累々たる刺客の屍を見やって、感情を抑えた平板な声で語った。

聞いた王子は眉を寄せて呟く。

「……愚かな。戦も始まらぬうちに首を締めるか」

「焦ったのでしょ。戦が始まれば、総指揮を殿下が執られるのは必定。その上でもし勝利したとなれば、継承権で劣る王弟殿下にはいつそう厳しい状況になりましょうから」

「なるほどな。」

「それはそうと」

突然冷やかな目つきになって、王子は魔術師を見た。

「私をたばかったな。危険はないなどと言って」

06. ではそのように

「私をたばかったな。危険はないなどと言って」

魔術師は唐突な話題転換に動じるふうもなく、壁際で立ち尽くす娘をちらりと見やった。何食わぬ顔で応える。

「定められた用法を守れば、そう危険ではありませんが」

「そうかもしれんな。お前がつきつきりで管理して、くべる香に一つまみの間違いもなくやりとげればな」

王子は冷たくやり返した。

少ない数の暗殺者に追われて、人気のないこの離れに逃げてきたのは偶然もいいところだった。身を隠すためにとっさに滑り込んだ小部屋に入って初めて、王子はここがニナンの魔女の跡継ぎが眠る部屋であることを知った。

きつく焚かれた眠りを導く香に包まれて、娘は血の気のない顔で横たわっていた。

触れた蒼白い頬は死人と紛う冷たさ。

尋常ならぬ、危険なまでに深い眠りであることは容易に知れた。

「だがお前が任務を帯びて城を離れたらどうなる？　あとを任された者が、面倒を厭うて一掴み香炉に入れたら？」

「殿下は瑣末なことまでお気になされすぎます。少しは我らをご信頼くださいませ」

「そういう問題ではない」

なだめるような魔術師の言葉に、王子はむっとしたように言った。

「やはりこんなやりかたは間違いだ。侍女として召す」
「ご随意に。その方策でよろしいでしょう」

王子はまじまじと宮廷魔術師を見た。

「お前、前と言うことが変わっていないか」
「まだ一週間も経っておりませぬ。それなのに、何もせぬうちに犯してもいない過ちで咎められたのですぞ。割に合いませぬ」

魔術師はすまして言った。

表情をあらためて刺客を示しながら語る。

「それに陛下が病床に就かれてこのかた、様子見に徹していた王弟派までこうして短慮を起こしました。眠らせて情報を秘匿する理由はもはやございますまい。」

今度こそオークイン皇国に利用されぬとも限りませぬゆえ、この者を帰すわけにはまいりませぬ。ですが、下級幻術とて魔法を使える者が城中にいるのも有益な様子」

「私の護衛をさせると？ この者を疑っていたのはお前だろう」
「護衛とまでは申しませぬが。それにどのみち名を握っておられると存じましたが？」

イウレースは茫然と二人のやりとりを眺めていた。

あまりにもきわどい内容だ。

王族間の権力闘争の内幕などというものは、無関係な部外者が耳にしてよいものとは思えなかった。前回は抑制の効いていた宮廷魔術師さえ、かなり迂闊なことを口走っているようだった。

淡い期待を抱きかけていたイウレースも、気付かざるを得なかつ

た。

結局、彼らは娘を当面城から出してくれる気はないらしい。

王子が娘の様子を見て取り、唇の端を歪めた。

娘が自分たちの意図を汲み取っていることに、彼もまた気付いている。そんな表情だ。

イウレースは情けない気分になって目を伏せる。

「まあよい、スーデイリム。お前の口の軽さからして、信用できると判断したのだろう。

然るべき仕事を与えておけ」

「御意」

頭を下げた魔術師と娘を置いて、王子は廊下へ歩み出た。控えていた衛兵隊長の報告を受けながら、その足音が遠ざかっていく。

魔術師が顔を上げてイウレースに目を向けた。

「さて、何か希望はあるか」

イウレースは困り果てた表情で首を傾げた。

いきなり希望を問われても、そもそも王宮でどんな仕事があつて自分に何ができるのかもよく判らない。

とりあえず思いついたことを口にした。

「あまり……おそばには……」

あまりに正直な「希望」に、魔術師が苦笑する。

「ほう。珍しい応えだな。殿下のそば仕えは競争率が高いというに」
「私は市井の粗忽な呪い師です。あまりからかうのはおやめください」

嫌そうに言うと、魔術師は揶揄するように片眉を上げる。

「呪い師にしては御大層な術だったぞ。私が来るまで、味方も誰一人踏み込めなんだ」

戸口だけで燃えさかる炎。

魔法の業火がまやかしてしかありえなかったが、近付けば紛うかたなき熱波が襲ってくる。

魔術師が駆けつけたとき、王子の近衛たちさえも二の足を踏んでいた。

「どちらも大した術ではありません。呪い師なら誰でも使います」

本当のことだ。

まじないや占いを生業にするような市井の術師にとって、ちょっとした演出のための幻術は必須なのだ。騙すと言ってしまえばそれまでだが、うまく使えば迷信深い村人の気持ちを後押しすることもできる。

それにまやかしとごまかしは魔女　もつと言えば女の専売特許でもある。

「確かにな。だが組み合わせで同時に発現させたのではないか」

王立の魔術学院で学んだ正式な術師に違いない宮廷魔術師は容赦なく指摘した。言葉に詰まった娘を見て、軽く嘆息して言った。

「殿下は鋭いぞ。あとで平和な暮らしに戻る気でののなら、いま少し気を付けるのだな」

イウレースははつと魔術師を見た。魔術師はほんの一瞬穏やかに微笑んでから、無表情に戻って言う。

「殿下に顔を合わせずに済ませたいというのなら……侍女ではなく使用人　まあ下女だな。厨房や掃除といったところか。ただ、きついぞ」

イウレースは微笑んだ。

「田舎育ちの世間知らずの魔女としては、侍女として粗相のないように過ごすほうがつらいでしょうね」

「そうか。ではそのように。来るがいい」

二人は惨劇の部屋を後にした。

07・平穏な日々

「今日は西の離宮の大回廊の掃除だって」

「ええー。あそこ柱ごとに彫刻あるじゃない。あれ全部磨くの？」

「しょうがないでしょ。まあイウレースには嬉しいんでしょうけど」

「ほんと、変わってるよね。あんなの見て何が面白いの……」

「あ、あの」

「判ってるわよ。好きなんですよ」

「侍女とかだったら、室内のすつごいお宝も見れるんだろうけどねえ」

「あの、別に……」

「まあ、あの回廊もおつきなタペストリーとかあるから、あんたはきつと楽しいわよ。でも手は休めないでね。さ、行こ」

それからの数週間は、イウレースにとっては忙しくも平穏な日々だった。

日の出と共に起き、こまねずみのように働いて寝る。楽ではなかったが、一国の王城だ。身なりは清潔に保てたし、食事も豪華ではないが充分だった。

宮廷魔術師が連れてきたということで最初は警戒されたが、「あこがれの舞踏会をこっそりのぞこうとしたが、身なりの悪さで捕まった」という決して嘘ではない事情を説明すると、みな同情を示してくれた。

もともと真面目な性格で雑用には慣れていることもあり、すんなり溶け込むことができた。

掃除で城内を巡ることはあっても、それらの仕事は基本的に貴人たちの目に付かない時間帯に行うべきものだ。王族はもちろん貴族

を目にする機会は少ない。

ニナンの村では見ることもない建築様式に華麗なタペストリーや調度の数々、そして名工の手による芸術品を毎日眺めて、ときには触れることもできる。

どちらかと言えば、イウレースは幸せでさえあった。

だが伏兵は思わぬところから現れた。

この王宮では、適材適所の名目で配置変えが行われていた。

自薦他薦を問わず申請があれば、適性を審査した上で問題なしとなれば職場を変更できた。

王の病が悪化して政務を任された王子が実験的に取り入れた方針で、貴族や大臣からの反発を受けながら手探りで実施されているという話であった。

もちろん階級が上の者の一声で簡単に覆るし、そう頻繁に変わるというものでもない。また身元の不確かな者が入り込む危険も当然ながら存在する。

だが一方で厩番が並々ならぬ腕を持つ料理人であることが判ったり、兵士が熱烈な希望の末に素晴らしい演奏家になったりと、利点も多かった。

なににせよ、一度決まった配置が絶対のものではなかったのである。

かつて宮廷魔術師がイウレースに「殿下のそば仕えは競争率が高い」と言っていたのは、つまりそういうことだった。

もちろんイウレース自身は現状にたいそう満足していた。満足しなかったのは、親切で人の好い同僚たちだ。

彼らはすぐに気が付いた。

この新入りは自分たちとは何かが違うということを。

イウレースは彼らにとつては磨くのが面倒なだけの彫像の素晴らしさに見惚れ、考えたことすらない神殿の建築様式に興味を示した。どうやら医療に関して何がしかの知識もあるらしく、怪我をしたり風邪を引いたりすれば城中に生える薬草を見繕ってきて、簡単な手当を施してくれる。

このような気立てもよく真面目で若い娘が、もう少し上等な服を着て城中を歩いていても不自然ではあるまい。

そう考えて、娘の好奇心をもっと満たしてくれる場所へ押し出そうとしたのだ。

かくして同室の下女から相談を受けた女中頭と、怪我を手当てしてもらった兵士数人と厩番らからの推薦書が担当部署に提出された。そしてイウレースの身柄を預かる保証人であり、王子の補佐官を兼務する宮廷魔術師のもとへ回された。

「……いま少し気を付けろと言わなかったか」

苦笑しながら魔術師は、呼び出した娘に数枚の半紙を差し出した。受け取ってざっと眺めたイウレースは、うるたえた表情で魔術師を見る。

「これ……？」

「うち三通はもう二度目だな。殿下には知らせておらぬが、これ以上握りつぶせば一人二人は私の上に直談判しそうな勢いらしい。つまり殿下にな。そうなれば今度は私がとばっちりをくう。

死にそうなところを助けたと？」

イウレースは書状を繰った。見覚えのある名を見留め、文官の代筆で長々と書かれた文面を読んで激しく首を振る。

「馬に蹴られて壁の金具に刺さったんです。私は薬草で血止めと折れた骨の固定だけして、あとは神殿のかたにお願いしました。どちらかと言えば、助けたのは癒し手の」

「凄い剣幕だったとか？ 応急手当てが済んでいるからと立ち去ろうとした見習い僧に食ってかかって、遂には神官に術を施させたと次の書状にある」

慌てて次を見ると、確かにそのようなことが書かれていた。イウレースは所在なげに言った。

「だって、あんな錆びた汚い金具に刺さって……。手当てしてもあのままじゃ危なかったんです。普通はそう……しませんか」

「ほかの者でもそうするだろう。」

だが一般の者は、汚れた金具に刺さったせいで今後傷が悪化する可能性があるなどという理由で、神殿の者を言い負かすことはできないな」

萎れた娘を眺めて再び苦笑して、魔術師は言った。

「とりあえず、下女こしもへから格は上げねばならぬ。希望はあるか」

「……あまり……おそばには……」

前回と同じ質問に対して、イウレースもまた同じ返答しかできなかった。

「それほど嫌か？」

「なんだか……畏ろしいんです」

イウレースはうつむいた。

「敬愛に足るおかたです。でもあまりにも、その　眩し過ぎて」

魔術師は呟いた。

「であろうな」

王子に名を奪われたのならば、彼の内面もまた垣間見たはずだった。

この娘は正常で思慮深い精神の持ち主だ。

彼の王者の器に威圧されてしまったのだろう。

「では、私のところへ来るがいい。書類の整理でもしていればよろう。そんな物が山ほど来るゆえ、この有事の折には手が足りぬ」

魔術師はイウレースが握る半紙の束を示して言った。

「はい……」

「ただ、ここにはごくたまにだが殿下も来られる。見つからぬよう気を付けるのだな」

「はい……？」

そこまで顔も見たくないというほどのことはなかった。それに、多少の関わりはあったが、呪い師がそう珍しい世の中でもない。王子に目を付けられているほど覚えめでたいとも思えなかった。

「目に付けば……いや、いい」

言いかけた言葉をやめ、魔術師は首を振った。
今後の指示を出して娘を下がらせる。

どのみち無駄だということが、魔術師には判っていた。

あの娘は聡明過ぎる。しかも一方で本人の言うように田舎育ちの
世間知らずだった。

願い通り目立たず穏便にことを進めるには、他を欺く術を知らね
ばならぬ。

対する相手は策謀渦巻く宮中で、腹の探り合いにかけては並ぶ者
なき智者。

しかも、智者ではあるが俗世の者でもあった。

「もって二週間ほどか……」

08・書庫

正確には、二週間と三日もった。

イウレースはほとんどの時間を、宮廷魔術師の補助をして過ごしていた。

彼の仕事はかなり忙しく、執務室には常に書類が積み上がっている状態だった。中には宮廷魔術師が担当するものではなさそうな案件まで持ち込まれているようだ。

政治に疎いイウレースはそういうものかとも思いながら手伝っていたが、気付いた魔術師がほろ苦い口調で教えてくれた。

「先月までは有能な担当者がいたのだがな」

聞けばもともと彼はそれなりの家柄の貴族家の出身で、魔術の才がなければ騎士か文官になっていたとのことだった。こういった仕事のいくらかは自ら望んで引き受けてもいるらしい。仕事の合間に語った魔術師は、肩をすくめて締めくくった。

「まあ、よもやここまで増えるとは思わなかったが」

ともあれ最初の数日を書類整理に費やすと、ある程度は落ち着いて余裕もできてきた。

その後は雑用を言いつかったり書庫を片付けたりしつつ、お茶や食事の給仕を手伝いに行くような仕事を中心になった。言ってみれば侍女と官吏の中間のような状態で、忙しくも充実した日々を送ることができた。

ごくたまにという魔術師の言葉通り、王子が訪れたのは一度だけだった。

ある日イウレースがたまった書類の綴りを書庫に納めて戻ってきたら、魔術師の執務室の扉に鬱金の髪が消えるところだった。とりあえず書庫に再び行つて掃除をしてから戻るとすでに王子の姿はなく、宮廷魔術師が嘆息していた。

大臣たちとの会議のあとで、何か相談しに立ち寄ったらしい。だがそれさえも護衛の兵士や宮廷魔術師ら臣下からしてみれば、苦々しいことであるようだった。

この国の王子は、どうやらいささか行動的に過ぎるのだ。

本来は用があれば、臣下の側が王子のもとに出向くのが筋だった。刺客に襲われたのも単独行動時を狙われたことが少なくないのだと、魔術師がぼやいていた。

二週間と三日後。

その神出鬼没さがイウレースにも発揮された。

「なるほど、お前か」

図書室で突然背後から声をかけられ、イウレースはよろよろと運んでいた十冊ほどの綴り冊子を取り落とした。

「あ、あつ」

床にばら撒いた綴りを慌ててかき集めていると、横合いから伸びてきた手が素早く数冊を拾い上げた。

さらに残りの綴りをイウレースから奪って王子は言った。

「どこだ？」

「い、いえっ！ あの、そんな」

「重い。早くしろ」

取り戻そうと焦って手を伸ばす娘ににべもなく言い放つ。イウレースは仕方なく言った。

「奥の書庫に入って三列目の、管理日誌の棚に……」

王子はすたすたと言われた棚に歩いて行って綴りを詰めた。あたふたと後を追ったイウレースが見ると、日誌はきちんと日付通りに並んでいた。王子は娘を振り返って問う。

「まだあるのか？」

「いえ……」

彼はうろたえる娘の様子にふと苦笑した。

「とって喰いはしない。そう怯えるな」

イウレースは恥ずかしくなってうつむく。そしてようやくここに彼がいる理由に思い至った。

「もしかして何かお探ですか……？」

貌を上げて問うと、王子は書庫を見渡し、次いで図書室とつながる扉のほうを見やって応えた。

「戦史が見たいのだが。判るか」

「あ、はい……。書庫の突き当たり右の二段目から六段が戦史です。あと図書室の二階の手前三列に研究文献があります」

「そうか。ではこちらだな」

そのまま一礼して下がろうとしたイウレースを見ずに歩き出す。

「一人では持てん。ついて来い」

歩きながら彼は言った。

「最近スーデイルムの仕事が早いので、誰ぞいい助手でも見つけたかと思っていたが。お前だったか」

「……」

なんとも応えられず、イウレースは黙って彼のあとを歩く。

王子は気にした様子もなく、世間話とでもいうような気楽な調子で続けた。

「城の暮らしは慣れたか？」

「はい……。でも、いろいろ珍しくて」

王子は笑った。

「そうか。まだしばらくは、いてもらわねばならぬようだ。せいぜい学んでいくがいい」

戦史はそれぞれの戦ごとに様々な厚さで並んでいた。王子はざつと眺めて必要な本を抜き出していった。イウレースに幾冊か渡して自分でも五、六冊を抱え、引き返す。

書庫の入り口まで戻ると、扉の前で宮廷魔術師が渋い顔をして立

っていた。

「必要でしたら我らにお申し付けください。護衛たちが捜しており
ましたぞ」

「最近はあると言えば会議ばかり。この状況では遠乗りにも出られ
ぬし鍛錬にも飽きた。全部他人にやらせていては、体が鈍るわ」

王子は平然と言った。

「それより狡いぞ、スーデイルム」

「は？」

「便利な助手を見つけたようではないか」

王子は後ろで書物を抱えて所在なげに立つ娘を示した。

「お前が最近やたらと早く書類を回してくるから、決済が追いつか
ぬ。半分寄せ」

魔術師は一瞬イウレースを見た。
それで彼女にも判った。

おしまいだ。

「狡いという言われようは心外ですが、無論お望みとあらば。
半分でよろしいので？」

魔術師は大げさに嘆息して言った。

「構わん。実際お前も忙しかろう。こういう仕事ができる者は重宝
だ。ただのそば仕えなど、ほかの者に任せればよい」

「では週のうち三日は私のところにお寄越してください。四日は殿下のおそばに……」

「それほどは要らん。二日でもいい。一日休みとして、もう一日は図書室にでも置いてやれ」

王子はにやりと笑う。

「ここ二年は誰も触っておらぬはずの戦史の場所まで知っているのだ。読みたい本もあるだろう」

彼は笑って真っ赤になったイウレースから本を取り、両脇に大量に抱えて去って行った。ようやく主君を探し当てた近衛兵の苦言を適当にあしらう声が遠ざかっていく。

魔術師が静かに言った。

「いま少し気を付けろと、言っただろう」

「

イウレースは悲しげに嘆息した。

09・王子の塔

王子の部屋は城内にいくつかあったが、離れにもさらに一つあると知ったのは三度目の伺候の時だった。

指示を出された場所に向かったイウレースは、見覚えのあるその塔に声をあげそうになった。

最初に捕まった時、連行された塔だった。

あの日は確かに狭い扉をくぐって中に入った記憶があったが、塔の周囲には入り口らしきものがなかった。困つてぐるぐると二周ほど回っていると、突然壁の一部が揺らいで扉が現れた。

恐る恐る中に入り、憶えのある螺旋階段を昇る。

塔の内部も、何か奇妙な雰囲気だった。

窓がなく松明や角灯ランタンのような光源もないのに、階段全体がほんのりと明るい。今回は動転して気付かなかったが、思い返せば二階層ほど昇るまで扉が一つもなかった。

今もかなり歩いたが、ひたすら階段ばかりだった。

三、四階層上がったころ、ようやく扉が現れた。

こもった声がノックに応える。

「開いている。入れ」

王子は傍らの卓に広げた図面に見入ったまま、顔も上げずに言った。

「そちらの机に文箱がある。未決は向かって左だ」

イウレースは言われた通り、持ってきた分厚い書類の束を左端の箱に入れた。

「……本はどういたしますか？」

これには片手が壁の一面を指して応えたので、そちらにあった本棚に立てかける。

室内は整然とはしていたが、様々な物が置かれていた。

王子が今のぞき込んでいるのはどこかの地図らしく、卓にはほかにも同じような大きさの巻物が積み上げられている。本棚には先日持ち出した戦史が並び、それぞれ数箇所には紙片が挟んであった。

部屋の様子をぼんやりと眺めていると、王子が地図から離れて執務机に向かった。箱の縁まであふれた書類を見て低く唸る。

「なんだこれは。」

いくらはかどるからと言って、一気に寄越すことはあるまいに」

悪態をついてから、王子は初めて気が付いたかのようにイウレースを見た。

「おお、悪かったな。重いものを遠くまでご苦労だった」

「いえ……」

「大臣どもがこまごまとうるさくてな。スーデイルムと違って、仕事がちつともはかどらぬ。少なくとも、ここならば邪魔が入らずに済むのだ」

言いながら、卓に着いて今度は凄まじい勢いで書状を繰って決済を始める。

どうすればよいか判らず立ち尽くすイウレースに、王子は手を止めずに言った。

「何か話せ。単純作業ゆえ飽きる」

「え……あの」

イウレースは困って王子を見た。

結局何を話していいか判らず、とりとめもなく尋ねる。

「この塔は殿下の専用なのですか？」

「そうだ。王位に絡む王族と要職の幾人かが、それぞれ専用の塔を持つことができる。」

今は王弟殿下と私のほかは、大神官ゼラー二猊下と宮廷魔術師だな。宮廷魔術師は筆頭のミオベル師が今は半隠遁状態ゆえ弟子であるスーデイルムが使っている。

他人はまず立ち入らぬゆえ、好き放題だ。私やスーデイルムのようにやたらと魔法を施してみたり、大神官のように神との対話のための聖域としてみたり。

亡き妃殿下の塔は、それは豪華だという話だぞ。次の王妃以外は確かめようもあるまいが」

「……殿下は、他人に立ち入られることをお気になさらないのですか……？」

「お前のことか？」

王子は素っ気なく言って次の箱にとりかかった。

「もう、一度入っているだろう」

「……」

取り付く島のないもの言いにイウレースは黙り込んだ。
王子は顔を上げた。少しの間娘を見てから、再び仕事に戻って言う。

「知っている者は、呼んでもやって来ない。あとで謝ったほうがまだと思っている。」

知らずに来た者の半数は、一周した時点で尻込みする。残りのうち半分は突然扉が出てきたことに驚いて逃げる。それでも入ってきた者のほとんどは、階段を十段と昇らないうちに己の行為を後悔して、出してくれと泣き喚く。

ついたあだ名は“王子殿下の試練の塔”だそうだ。
どうだ？ 試練を乗り越えた勇者としては「

イウレースは、癩癧を起こして喚き出しそうになるのをぐつと堪えた。

己の愚かさにめまいがした。

「試しておられたのですか」

「邪魔は要らぬが、一人ぐらいいは手がほしい。めでたく先着一名の座を射止めたわけだな」

「今ほとんど、とおっしゃられましたか……？」

「内訳を聞きたいなら、塔の中まで入った者はお前で五人目だ。」

スーデイルムとお前を除いた三人は、翌日には城勤めは向かないと言って田舎に帰った」

癩癧の波が過ぎると、今度は泣きたくなってきた。

イウレースは惨めたらしく言った。

「私にも、城勤めは向かないようです……」

「だが田舎には戻れんな。可哀想なことだ」

「それに、ほかのかたとは状況が違います。私は二度めになるわけでしょう」

ここで引き下ると「先着一名」が確定してしまう。「冗談ではなかった。

イウレースはなんとかしようと食い下がった。

「それに、最初の時には塔にも兵士がいたではありませんか」

連行されて、塔の入り口で衛兵から全身鎧姿の兵士に引き継がれた記憶が残っている。機械的なまでに気配を感じさせない抑制された動きで、イウレースを部屋に閉じ込めて出て行った。少なくともあの人物は、宮廷魔術師ではなかった。

「あれか？」

王子が部屋の一角を示す。

のろのろと追って見た先には、一揃いの甲冑が立たせてあった。兜のみが脇の台座に置かれている。

中身は空洞であることが一目で判った。

「……」

娘の情けなさそうな表情を見て、彼はわずかに苦笑する。

「動かしたいなら兜を乗せるがいい。術が面倒ゆえ、納得してくれただろうが助かるが。」

手がほしいという意味が判ったろう」

「でも……」

「いい加減に認めるがいい。お前は運が悪かったのだ」

王子はきっぱりと言った。

「別に無償で働けとも言っておらぬ。国中の魔術師がどれほど望んでも読めぬような書物が、あの図書室には山ほどあるのだ。

この際あきらめて、勉強でもして帰れ。ニナンの魔女から引き継ぎを受けておらぬというなら、ここで足りぬ分を補っておけばよろう」

イウレースははっとした。

彼の思慮の深さに改めて気付かされ、同時に己の不明が恥ずかしくなる。

「申しわけございません……」

「謝られるほどのことではない。

よし、と」

彼は素っ気なく言った。書類を一まとめにして、イウレースの持ってきた箱に入れた。

娘を見て問う。

「ほかに仕事は？」

「いえ、殿下がございませんのならば」

「そうか。ではこれを大臣府に届けてくれ。そのあとは好きにしていい。

日が暮れたら、葡萄酒を一本と乾酪でもくすねて、またここに来い」

イウレースはうなずいて箱を受け取った。

部屋を出ようとした時、王子が軽い口調で娘の背中に向かって言った。

「お前には、あとで謝る手段は許さぬ。きちんと来るがいい」

10・葡萄酒の罖（前書き）

同意のないR15描写あり。
苦手な方はご注意ください。

10・葡萄酒の罖

今度は塔の前に立つと同時に扉が現れた。

ひたすら階段を昇っていつて辿り着いた扉の奥には、長椅子でくつろぐ王子がいた。飾りけのない軽装に着替え、寝る前といった雰囲気だ。

差し出された盆に玻璃グラスの杯が一脚しかないのを見て取り、彼は苦笑した。

「一人で飲むにはいささか多いな。お前の分は？」

イウレースは首を傾げた。

「いえ、私は……」

「まあいい。座れ」

隣を示されて恐る恐る腰を下ろす。

だが葡萄酒の瓶から栓を抜いて杯に注ぎ始めてすぐ、イウレースは動きを止めた。

「……？」

空気に触れて立ちのぼった葡萄酒の芳香に、微かに別の香りを感じたのだ。

城に来てから知ったものではない。

村の、薬師であり呪い師である自分の家で。

「どうした？」

のぞき込んできた王子には応えず、イウレースは掌に葡萄酒を落としてすすった。

今までに味わったことのない豊かな妙味と、馥郁たる香気が広がる。

味に異常はない　だがそれが特徴だ。

その奥にほんの微かに、焦し砂糖カラメルを思わせる独特の香り。

続けて耳を弄するような勢いで、心臓が脈打ち始める。

イウレースはどうか息を吸って、囁くように尋ねた。

「殿下は……心臓に持病がありますか」
「いや」

彼は四分の一ほど注がれた杯を取って、中の液体を含んだ。転がすように味を確かめ、すぐに杯に吐き出す。

続けて壁際の棚に並ぶ小瓶から一本を取り、中の丸薬を一粒噛み潰して飲み下した。小瓶を娘に押しやり、皮肉な笑みを浮かべて咳く。

「こんなに摂っては、持病があっても心臓が活発になりすぎるな。もっと少なくすれば、気付かれずに済んだものを。」

何をしている。お前も早く飲め」

隣で胸を押さえて前のめりにうつむいた娘を抱き寄せ、丸薬を唇に押し込んだ。

歯を食い縛ったまま震える娘の口から、丸薬がこぼれ落ちる。

「
」

彼はすぐさまもう一粒取って噛み砕き、口伝えに与えた。

いったん離れて部屋を去り、階下の部屋から水差しとカップを持って現れる。まだ震えている娘の唇にカップを押し当てるが、ほとんどが顎から喉へ伝ったのを見て取り再び口移しに流し込んだ。

やがてイウレースが詰めていた息を吐いた。

浅い呼吸を繰り返してから、我に返つてのろろと彼の腕から出ようとする。

「申しわけ、あり、ません……」

王子はクッションの位置を動かして娘を深く座らせた。のぞき込んで問う。

「大丈夫か」

「はい……」

イウレースはうなずいてから、卓の瓶を見た。

乾酪^{チーズ}や果物などは厨房ですぐに手配できたが、酒は誰に頼めばいいのか判らず、いろいろな相手に訊いて回ったのだ。

そうしたら夕刻に見覚えのない侍女が話を聞いたと現れて、「極上の樽から用意した」と瓶を手渡された。

宮廷魔術師はあれほど王子を一人にするのを嫌がっていた。

それほど敵が多いのだ。

王子がこの魔法に護られた塔で執務をするのも「大臣がうるさい」というだけではなく、刺客を案じてのことかもしれない。

疑うべきだったのだ。

「申しわけありません……」

「別にお前が毒を盛ったわけではなかつた」

王子は杯を指で弾いた。硬く澄んだ音が響く。

「珍しいことでもない。特に戦が近くなると、こういう動きは活発になるな。犠牲になった毒見役もいる。私も多少の訓練は積んでいるが……この量はさすがに危なかった。

それにしてもよく気付いたな」

葡萄酒に仕込まれていたのはギターという毒だった。

ごく少量の乾燥葉を強心剤として利用することもあったが、毒としての効果のほうが有名だ。

特殊な方法で精製したものは無味でほとんど無臭。一つまみが入った杯を干すと、処置が遅ればまず助からない。

この葡萄酒は、一口でこれほどの効果を發揮した。
よほど大量に仕込まれているに違いない。

「婆さまは……魔法より、本草が得意でした……。それにニーナイヤモル口のような香が特に好きで……香りには敏感でしたから」

イウレースは呟くように応えた。

「あまり高価でない毒なら、区別できます……。毒見役をお探しながら……」

「それで毎回倒れるわけか？」

王子は容赦なく指摘した。

娘の肩に手をかけ、引き寄せながら言う。

「お前は今のままで充分に重宝だ」

まだ毒の余韻で朦朧としていたイウレースは、迫ってくる王子の美貌をぼんやりと眺めていた。

彼は微笑って距離を詰め、唇を重ねる。

「！？」

我に返ったイウレースがびくりと身を震わせた。

「口直しだ」

一度浮いた唇が、触れ合わんばかりの近さで囁いた。再び距離を詰めると、今度は唇を食むようにしてこじ開けてくちづけを深めていった。

広がっていた薬の苦味が、何か妖しい別の感覚に塗り込められていく。

ようやく離れた唇は、そのまま下に滑らされた。先ほどこぼれた水をなぞるように喘ぐ娘の喉もとを下り、鎖骨のくぼみに押し当てられる。

「殿、下？」

王子の涼しげな笑いを含んだ声が届く。

「本当は酔わせて前後不覚にさせるつもりだったが。まあ似たようなものだな」

「や……！」

力が入らない身体が長椅子から掬い上げられて奥の寝台に運ばれる。

愕然と目を見開いたイウレースを見下ろして、彼はからかうように言った。

「スーデイルムに聞かなかったか？」

私のそばに召し上がるというのは、こういうことだ」

「いやです……！」

「もう遅い。この際諦めて、勉強でもして行け」

起き上がろうとしたが、上からのしかかった身体が動きを封じた。突っ張ろうとした腕が掴まれ、押さえ込まれる。

確かに、もう何もかもが遅かった。

「や、め……っ！」

ほどなく、稲妻がイウレースを打ち始める。

焼き尽くす灼熱と、

絶望的な甘美さを伴って。

それからの長い夜　。

少なくとも後半の記憶は、イウレースには残っていなかった。

翌朝、助手を務めに来るはずの娘は魔術師のもとへ現れなかった。代わりに仕事前といった様子でふらりと現れた彼の主が笑い含みに一言言って去って行った。

「休みだ。恐らく一日動けまい」

魔術師は肩をすくめてから、何_いこともなかったかのように己の仕事に取りかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0507z/>

王子と魔女のマスカレイド

2011年12月17日18時49分発行